

墓標からみた近世の寺院墓地

神奈川県平塚市大神真芳寺墓地の事例から

朽木量

Temple Graveyards of the Early Modern Period Viewed from the Perspective of Grave Markers

- ①近世墓標の資料的価値と墓標研究の広がり
- ②真芳寺と付属する墓地
- ③墓地・墓標から見た江戸近郊の寺院
- ④まとめ

【論文要旨】

従来の墓標研究では、墓標の形態変遷を中心に、石材、寸法、戒名の数や記載法などについて分析してきたが、最近では地域史の中での墓標の位置づけや、村落内の階層性を踏まえたながら墓標を捉え直そうという動きが高まっている。そこで、本稿では神奈川県平塚市大神真芳寺とそれに付属する墓地を取り上げ、墓標の悉皆調査と過去帳の分析を通じて、墓地の成立と墓標のあり方を考察した。

まず、過去帳に記載された故人の居住地を見ると、寺院が所在する大神村を中心に戸田、小糸葉、長沼、田村、津古久、落合など近隣諸村をはじめ、遠くは伊勢原、厚木、海老名市杉久保、海老名市本郷、寒川町官山や江戸御府内など極めて広い範囲に亘ることが確認でき、真芳寺が近隣諸村の中核的寺院として機能していたことが指摘できる。さらに、過去帳の記載内容と真芳寺墓地内の墓標悉皆調査との比較から、

1 過去帳に記載されているにもかかわらず真芳寺墓地に墓標の無い物故者が多い

と、

2 墓信徒全体の中でも中位に位置する信士・信女の位号を持つ墓標造立数に比して、より下位の禅定門・禅定尼や禪門・禪尼、より上位の院号居士・大師や居士・大姉などの減少率が著しいことが指摘できる。位号にみられる格の違いを社会的階層に置き換えて解釈した場合、真芳寺墓地が中位の限られた階層の墓地として機能していたと考えられる。これまでの墓標研究では村の共同墓地や寺院付属墓地、家単位の個別墓地の墓標を余り区別せず地域的差異を論じてきたが、真芳寺の事例を見るかぎり、村の共同墓地が村全体の状況を強く反映するのに対し、寺院付属墓地は当該寺院の地域的・社会的位置づけ・役割に影響されながら近隣諸村との関連性の中で成立しているようである。今後の墓標研究はこうした側面に配慮しながら、地域史全体の中での墓標を解釈していくべきである。